

医者は天職？

札幌市医師会
とよひら公園内科クリニック

藤本 晶子

最近女子学生さんの割合が増えましたが、私が医者になった当時はまだ女性が一割にも満たない時代だったので、お仕事は？と聞かれ「医者です」と言うと、よく何故医者を志したかと聞かれることがあります。いろいろ理由はあるのだと思いますが、基本的に私は両親、特に母が医者であったことが一番の理由なのかなと思っています。

なんといってもリビングの机にあったのは手術用のばらばらになって番号の付いているハサミであったり、油紙に包まれたコメガーゼと一緒にメスだのイソジン、ハイポが置いてあって、市販の消毒薬など使ったことがない環境で育ち、小学校低学年から保健係をして転んで膝をすりむいた同級生を保健室へ連れて行き、「しみるよ」と言って消毒、サビオを貼ってあげていた私は、小学校も中学も卒業文集の将来の夢のところに「お医者さん」と書いていました。

でもきつと現実的に「医者」を生涯の仕事にしようと考えたのは高校の時。進学先を、と考えたときに専業主婦をしている自分のイメージが湧かず、当時の担任に三者懇談の席で成績を見ながら「ほっほ～、夢は大きい方が良いですな」と苦笑されて母が激怒していたのですが、なんとか順天堂に進学、卒業と同時に北大第一内科に入局し、研修やいくつかの病院勤務を経て、この春で開業して丸14年。医者歴も三十余年経ちます。

その間、本当にいろいろな患者さんを診ましたが、今回書くチャンスを頂いたのが偶然なのか必然なのか、私が助けられたと思う患者さんのことを書こうと思いました。

まず最初の急患は、実の父の心筋梗塞でした。卒業後すぐの合格発表前、こどもの日にゴルフ場で下壁梗塞を起こし、父の病院に救急搬送された父。まだ戻ったばかりで札幌の先生の知り合いもいない中、はたと考えついて母校の循環内当直医に相談電話をかけ、「ウロキナーゼをワンショット側注し、点滴に混注しながらCCUに運べ」という的確な指示を受け、一年後に他部位に酷い狭窄が見つかったACバイパスを受けることになるのですが、そのおかげで父は93歳の今も健在でいます。他にも義父はPSAがまだ4台というごく軽度高値の段階で前立腺癌を見つけたし、義母は早期胃癌と昨年心胸郭比が少し拡大したことを契機に大動脈弁狭窄を発見し、大事になる前に手術を受けてもらうことができ

ました。高校の同級生も出張で来札したからとたまたま一緒に飲んだ時、検診でPSA高値を放置していたと聞き、絶対精密検査を受けるように説得し、彼は東京だったため、母校の同級生に託したのですが、やはり早期癌のうちに手術を受けることができました。

さらに昨年の「偶然」早期発見できた患者さんの話です。

一人は8年ほど前から糖尿病で診ていた81歳男性。たまたま「先生俺、ぼけてきたから頭のCTでも撮って認知症の検査をしてくれよ」と言ってきたので、普段の様子から認知症は心配ないから、一度も検査していないし、と、胸部～骨盤のCTを撮ってもらったところ、肝左葉に6cmの肝癌が見つかりました。内視鏡をやるときに抗原チェックはしていたのですが、抗体はチェックしていなかったのが発見できなかったB型肝炎のキャリアーだったようです。幸い限局的だったので腹腔鏡で取り切ることができ、多分この人は肝癌では亡くならずに済むと思います。

もう一人、長引く咳が主訴で初診の58歳男性。レントゲンで肺気腫を疑い、ついでに、と胸部だけではなく骨盤までCTを撮ってもらったところ、偶然この人には5cmの未破裂腹部大動脈瘤があり、破裂前に手術を受けることができました。

この二例を診断し、外科的処置をお願いした紹介先から経過のお手紙が戻ったときに「きっと私は天国へ行けるよね」とスタッフと話していたのですが、もしあの時全身を撮っていなければきっと肝癌や動脈瘤は発見できなかったわけで、あの時CTの部位を胸部～骨盤で撮ったおかげで発見できたのは事実です。その話をした先輩には「女の勘だな」と笑われましたが…。

自分の医者人生を振り返ってみて、やはり人の命を助けることができたと思う瞬間に、本当にこの仕事をしていて良かった、とつくづく思うわけです。普段から（もちろん嫌な患者さんもいますが）外来の患者さんとのやりとりは楽しくて、今のクリニックはスタッフとも上手くやっており、忙しくも楽しい毎日です。外来で仕事のストレスが原因でいろいろな症状が出ている患者さんを診る度に、好きなことを仕事にできている自分は幸せだと思うとともに、こうやって偶然にせよ命を救うことができた実感できる「医者」という仕事は、きっと自分にとって天職なのだろうと思い、この道に進ませてくれた両親に感謝の日々です。